

氏 名 佐久間 俊明

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大甲第 1369 号

学位授与の日付 平成 22 年 9 月 30 日

学位授与の要件 文化科学研究科 日本歴史研究専攻  
学位規則第 6 条第 1 項該当

学位論文題目 戦前期日本リベラリズムに関する思想史的研究  
－清沢冽を中心に－

論文審査委員 主 査 准教授 樋口 雄彦  
教授 安田 常雄  
教授 久留島 浩  
名誉教授 山本 義彦（静岡大学）  
准教授 源川 真希（首都大学東京）  
准教授 大串 潤児（信州大学）

## 論文内容の要旨

本論は、戦前期日本を代表する自由主義的言論人、自由主義者と一般に規定される清沢洌（1890年2月8日～1945年5月21日）の言論活動と思想を、日本近現代社会思想史、とりわけ、「自由主義」研究の視角から検討するものである。

本論の課題は、第1に、清沢とはどのような意味で「自由主義」的言論人、「自由主義」者なのか、明らかにすることである。第2に、清沢の「自由主義」を19世紀～20世紀の「自由主義」の歴史の中に位置づけることである。具体的には、1930年代半ばの昭和期「自由主義」論争に位置づけることを目指す。第3に、1910～40年代前半にかけての清沢の「社会認識」を明らかにすることである。

第I章においては、清沢洌の思想形成（1890～1910年代）を検討した。第1に、井口喜源治が清沢に与えた影響を研成義塾のみならず聖書研究会、東穂高禁酒会、穂高教友会も含めて検討し、その結果、清沢が熱心かつ理想主義的な無教会派クリスチャンであり、キリスト教社会運動にも関わっていたことを明らかにした。第2に、新発掘の史料の成果を活かして清沢のアメリカでの足跡をより精緻に解明し、さらに、「贖罪」思想に納得できなかった清沢は、渡米期にキリスト教「信仰」を捨て、同時にアメリカにおける研成義塾のネットワークから「離脱」することになったが、彼の中には価値判断の基準となる「モラルとしてのキリスト教」と井口から学んだ「信念」という精神的支柱が根強く残っていたことを指摘した。第3に、約12年に及ぶアメリカでの生活の中で「自由主義」の原型——自我の確立・権力からの自由・漸進主義——を獲得したことを明らかにした。

第II章においては、新聞記者時代（1920年代）の清沢洌の言論と思想を検討した。第1に、1920年代における清沢の社会認識の基本的枠組みを、「イギリスをモデルとした日本社会の民主化と国際協調論」と捉え、その国際協調論・日本社会論・モダンガール論を明らかにした。第2に、①国際協調と世界平和、②普通選挙制と政党内閣、③国家主義・軍国主義批判を基調とする清沢の「自由主義」が、1920年代後半から、これらの基調を維持しつつも、二つの側面——①英国労働党やケインズ『自由放任の終焉』の影響を受けて、「新自由主義」（New Liberalism）も「自由主義」とみなすようになったことと、②「広い意味の自由主義」は政策ではなく、「フレーム・オブ・マインド」であると主張するようになったこと——から変容したことを明らかにした。

第III章においては、清沢洌の「欧米旅行」（1929～30年）を取り上げ、第1に、ロンドン海軍軍縮会議の現地取材を通して、国際協調の観点から「対米7割」比率の主張を一貫して批判したことを明らかにした。第2に、清沢の世界恐慌認識を検討し、世界恐慌の結果、「米国の社会主義化」、すなわち、国家による経済への介入が強まると予測していたことを指摘した。第3に、この旅行で清沢は、英国の自由主義——①議会政治、②ハイパークのスピーキングコーナーにおける言論の自由と自由討議の精神、③個人のプライバシーに介入しない社会の有り様——を「実感」のレベルで経験し、その「自由主義」をより強固なものにしたことを明らかにした。第4に、イタリア訪問とムッソリーニとの会見は、ファシズムを指導者・政治思想のレベルで批判するのではなく、それを生み出した社会構造や国民性のレベルから批判する必要性を清沢に認識させる契機となったことを指摘した。

第IV章においては、フリーランス時代（1930年代）の清沢洌の言論と思想を検討した。第1に、昭和期「自由主義」論争を通じて、清沢の「自由主義」が、英国労働党・アメリカのニューディール政策・スウェーデンの修正資本主義を参照し、「思想」としての「心

構えとしての自由主義」(自由主義の普遍的な部分)と「政策」としての「社会民主主義」(自由主義の歴史的に変化する部分)の二段構えで構成されるようになったことを明らかにした。第2に、1930年代における清沢の社会認識を検討し、外交的には日本の膨張主義的傾向を厳しく批判し、国際協調路線の維持を、政治的には議会政治に不満を覚えつつも擁護する姿勢を示し、この延長線上に反ファシズム人民戦線論が提起されたことを、経済的には「社会民主主義」(修正資本主義)を鮮明にし、国家の市場経済への介入を容認したことを、社会的には滝川事件や天皇機関説事件に代表される言論・思想弾圧事件を批判し、「市民的自由」を擁護したことを明らかにした。

第V章においては、日中戦争下の清沢を「東洋経済新報社のブレーン」として捉えて検討し、第1に、2回目の「欧米旅行」(1937~38年)を取り上げて、清沢が、海外においては日本を擁護せざるを得ないという愛国心の「両義性」ゆえに、これまでの言論活動から「逸脱」し、投書活動により現実政治に奉仕したことを指摘した。しかし、自己批判能力を兼ね備えた「心構えとしての自由主義」を内面化していたがゆえに、たえず「愛国者」・清沢は自己批判に曝され、従来立場に踏みとどまったのである。第2に、『婦人公論』に掲載された清沢の国際時評を検討し、それが、戦争の目的と事態の進展を「肯定」せざるを得ない状況の中で、一定の批判精神の下、公平な視点から女性を対象に日本を取り巻く国際関係情勢を冷静な筆致でわかりやすく解説したものであることを明らかにした。第3に、清沢の外交史研究が、東洋経済新報社と中央公論社の支援と国際関係研究会や国民学術協会における議論の成果によってなされたことを明らかにした。

第VI章においては、アジア太平洋戦争下の清沢の言論活動と思想を『戦争日記』(『暗黒日記』)に焦点をあてて検討した。第1に、戦時下においても清沢の「自由主義」が持続・貫徹したことを指摘した。第2に、戦時下の清沢の社会認識と民衆認識については、①革命を「必須」とみなす認識が、1920年代以来の左右ラディカリズム批判の論理的帰結であることを明らかにし、②清沢の民衆に対する批判・反発は、時局に便乗した徳富蘇峰に代表される「出世主義者」や佐官級の軍人に対する批判・反発と共通する論理からなされていたことを明らかにした。第3に、清沢の戦後構想を明らかにし、清沢が戦後生きていたら、片山・芦田内閣期までの芦田均とほぼ同じ位置におり、吉田茂らの守旧派とは異なり、日本社会の民主化を促進する中道派(社会民主主義)の立場から論陣を張ったというこれまでの先行研究とは異なる試論を提起した。

以上の検討を踏まえて、終章においては、本論の結論として、第1に、清沢の「自由主義」とは、「思想」としての「心構えとしての自由主義」(自由主義の普遍的な部分)と「政策」としての「社会民主主義」(自由主義の歴史的に変化する部分)の二段構えから構成されていることを指摘した。第2に、昭和期「自由主義」論争に代表的な自由主義者として「参加」した清沢は、共産主義とファシズムとは異なり、「市民的自由」を追求しながら、19世紀の経済的自由主義から20世紀の社会民主主義へと「自由主義」の漸進的発展を目指す思想的位置に立っていたことを指摘した。第3に、清沢が、1920~1940年代前半にかけて「日本社会の民主化」という視点から、左右の全体主義とは異なる、漸進的かつ建設的な、換言すると、「社会民主主義」的な言論活動を展開したことを明らかにした。

要するに、本論はこれまでの先行研究とは異なる「社会民主主義」者・清沢肖像を提起したのである。

## 博士論文の審査結果の要旨

### I 本論文の独自性

- 1 本論文の独自性の第一は、自由主義的ジャーナリストといわれる清沢冽の言論活動と思想を、その生涯にわたって分析し、旧来の反軍部反ファシズムの戦闘的自由主義者像（宮沢正典説）、戦後民主主義的先駆的に主張した反戦平和主義者像（山本義彦説）、戦後の「保守本流」につながる理想主義的現実主義者像（北岡伸一説）、保守主義者像（渡辺知弘説）に替わって、日本社会の漸進的民主化を目指した「社会民主主義者」清沢像を対置したことである。そして清沢冽の「自由主義」の全体像を、思想レベルにおける「心構えとしての自由主義」と政策レベルにおける「社会民主主義」の二重性と捉えた点にあり、これは、清沢についての思想史研究において新しい問題提起となりうる「新たな清沢冽」ということができる。ここで「心構えとしての自由主義」とは、理論体系としての自由主義とは区別される「心の持ち方」（ハビット・オブ・マインド）であり、それは内面化を通して行動様式のすみずみに現われるものと捉えられる。この「心構えとしての自由主義」を基底において、政治経済面での政策としては「社会民主主義」が提起されることになる。具体的にはマルクス主義とファシズムの両極を排し、漸進的かつ建設的な社会改革案の提言として、資本による搾取や不公平な分配の問題を是正し、また行政権拡大の弊害や修正資本主義政策の誤りを是正すべく議会政治に期待をかけることになったのである。
- 2 資料に関する本論文の特徴は、言説の論理的・思想的分析を軸におく正統的知識人分析が中心であるが、膨大な量にのぼる著作・新聞記事・座談会などの公刊資料を基礎に、その初出原典にさかのぼって収集・活用し、従来検討されてこなかった新しい問題を発見・提起したことである。たとえば大逆事件による権力からの圧迫、大正期の女性問題を通じた男女平等の主張、戦時下において朝鮮独立問題を提起していたことなどである。また、清沢の郷里長野県の現地調査による新発見資料（研成義塾や東穂高禁酒会の資料や聞き書き、若き日のアメリカ移民関係資料など）や、未公刊の『清沢冽日記』（欧米旅行中の備忘録、1929～1930年、1931～1932年、1937～1938年の日記）を駆使して、戦争に突入する前夜の国際状況のなかでの清沢の思想と行動が分析されたことである。こうした手堅い歴史研究が本論文の重要な特徴である。
- 3 さらに本論文の新たな分析視角としては、思想史研究における地域社会史との接点や、「人間関係のネットワーク」の意味を提起したことである。これは清沢冽という人物を言論言説の側面から追跡するだけでなく、その人物の歩いた「経験」の位相から照射する試みとすることができる。たとえばこれまで教育から思想形成という文脈で捉えられてきた信州穂高時代の位置づけについては、地域社会運動から分析され、続く北米移民時代についてもキリスト教の「棄教」が、北米移民社会のネットワークからの「離脱」という視角から分析されている。こうした「経験」と「ネットワーク」への着眼は、言論人の個人史を超えて同時代の地域民衆との接点を明らかにする重要な視点であり、今後の思想史研究に貴重な問題を提起するものである。
- 4 さらに個別的論点に渉るが、本論文はいくつもの新しい問題を提起している点で注目される。

第一は、1930年代に展開された「自由主義論争」の全容をはじめて紹介し、そのなかでの清沢の自由主義の位置を鮮明に描き出したことである。特に「没落自由主義」をめぐるこの時代の論争は、マルクス主義者から国粹主義者まで網羅して行われた。特に本論文では、清沢と河合栄治郎、清沢と戸坂潤を焦点に、一方では河合の自由主

義の体系指向とその硬直性を衝き、他方で戸坂の自由主義への歩みよりと清沢の独自性を指摘している。第二に有名な「戦争日記」(暗黒日記)については、旧来の東条政権批判の文脈ではなく、清沢の「心構えとしての自由主義」の文脈で、日常生活の安定と家族の幸福という「自由」を軸に論じられているのが特色である。

## II 本論文の問題点

しかし本論文にも、いくつかの問題点あるいは今後の課題ともいえるべき論点がある。

第一は、清沢の思想を「心構えとしての自由主義」と「社会民主主義」の二段構えの構造と捉えたことは本論文の最大の成果の一つであるが、その二つの側面の相互関係が十分に論証されていない。第二は清沢の思想形成における儒教の役割について、著者は儒教やキリスト教とは独立のアメリカ流個人主義(自立と労働倫理)の文脈で分析しているが、清沢の生涯を貫く「中庸主義」は研成義塾以来の「儒教的教養」と結びついていないのか、第三に戦時下の清沢思想の特質は、さらに同時代の複雑な政治思想状況の分析を媒介に位置づけられることが必要であろう。たとえば、本論文は清沢の平和思想についてパワーポリティクスへの傾斜を強調するが、1928年不戦条約を高く評価していたことを軽視していないか、また植民地論では、石橋湛山らの植民地放棄論とは異なり、しばしば植民地支配を正当化する論理を含んでおり、戦時下においては三木清や尾崎秀美らの「東亜共同体論」から「東亜新秩序論」への流れにおいてどこに位置するかを明確にすべきである。また「行政権の優越」と「議会主義擁護」との緊張という問題については、同時代知識人のなかでどのような場所に位置づけられるのかは今後の課題である(たとえば矢部貞治との比較)。さらに情報は入っていたにもかかわらず、戦時下の清沢がなぜ「日系人強制収容」に触れていないのかなどの疑問がある。

## III 総括的評価

以上のような問題点及び今後の課題は残っているが、本論文は膨大な研究史と関連文献を博搜し、明治末期から敗戦までの清沢淵の生涯にわたる思想言論活動を対象に、そのすぐれた面とともにその思考の限界点も明示し、ひとつの新しい清沢淵像を提起したと評価できる。以上によって、本論文を博士の学位論文としてふさわしいものであると認め、合格と評価した。